大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

大阪府大高専の学生における過去5年間のTOEIC Bridge®スコアの推移について

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2019-01-28
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 谷野, 圭亮
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00007506

大阪府大高専の学生における過去 5 年間の TOEIC Bridge® スコアの推移について

谷野 圭亮*

A Report on the Changes in TOEIC Bridge® Average Scores of Students in Osaka Prefecture University College of Technology in the Past Five Years

Keisuke TANINO *

要旨

大阪府立大学工業高等専門学校では，学生の英語コミュニケーション能力の到達度を測るために 2010 年より毎年 12 月に TOEIC Bridge®を 1 ～ 4 年生で実施している．2017 年 12 月実施分より過去 5 年分の試験データを分析し，本校に在学中の学生の英語力の推移と，TOEIC®テストを概観し，これまでの教育体制の振り返りと現在の英語教育体制を示し，今後の学生指導を進める上で重要な点を示した．

Key Words:TOEIC Bridge®，外部テスト

１．はじめに

大阪府立大学工業高等専門学校(以下 本校)では 2010 年度以降，第 1 学年から第 4 学年の全学生を対象に，TOEIC Bridge® を毎年 12 月に受験させている．

多くの企業や大学編入，本校の専攻科入試には TOEIC®が採用されており，TOEIC Bridge®はその準備段階に位置づけられている試験である．

本試験を毎年行うことにより，他団体(特に他高専や短大)と本校の学生間の英語能力の比較や，日常的に範囲が決まっている試験しか受けていない本校の学生達に実力判定目的のテストを受けさせる機会を提供している．

また，毎年同時期に，学籍番号と紐ついてデータが出力される客観テストを行うことにより，聴解と読解のみではあるが，集団としての英語能力の推移だけでなく個人レベルの推移まで計測することが可能である点は学生一人一人を指導する上で大変有益な資料として機能している．

本稿は，2017 年度実施分から 5 年分のスコアデータを遡り，全国平均や学年別平均点の推移を確認しながら今後の本校での英語教育に活かすことのできる資料とし機能することを目指すものである．

2018 年 8 月 20 日 受理

* 総合工学システム学科 一般科目
(Dept. of Technological Systems : General Education)

２．TOEIC Bridge®について

TOEIC Bridge® は TOEIC® の下位テストの位置付けで開発された英語の初級レベルから中級レベルの学習者を対象とした試験であり国際ビジネスコミュニケーション協会による TOEIC Bridge®の位置付け[1](表 1)と文部科学省の CEFR(ヨーロッパ言語共通参照枠)の対照表[2](表 2)によると A 1 から C 1 までの 6 段階のうち B1 レベル，つまり下から 3 番目までの判定が 5～180 のスコアによって可能であるとされている．CEFR とは， B1 レベルは実用英語能力検定に換算すると 2 級程度に位置づけられており高校卒業レベルまでの英語力の判定が可能であるとされている．

本対照表は現在，大学入試改革の目玉として使われているものであるが，様々な理由から批判されやすい表であるものの，文部科学省がブリティッシュ・カウンシル，ケンブリッジ大学英語検定機構を参考にして作成したものである．また，CEFR B1 レベルについても同じ資料[2](表 3)によると，「学校，仕事，娯楽などで普段出会うような身近な話題について，標準的な話し方であれば，主要な点を理解できる．その言葉が話されている地域にいるときに起こりそうな，大抵の事柄に対処することができる．身近な話題や個人的に関心のある話題について，筋の通った簡単な文章をつくることができる」とあり，外国語コミュニケーションの基礎的な段階の能力であると言える．

CEFRレベル＊		TOEIC® Listening & Reading スコア		TOEIC® Speaking & Writing スコア		TOEIC Bridge® スコア	
		Listening	Reading	Speaking	Writing	Listening	Reading
Professional User	C1	490～	455～	180～	180～		
Independent User	B2	400～	385～	160～	150～		
	B1	275～	275～	120～	120～	84～	86～
Basic User	A2	110～	115～	90～	70～	64～	70～
	A1	60～	60～	50～	30～	46～	46～

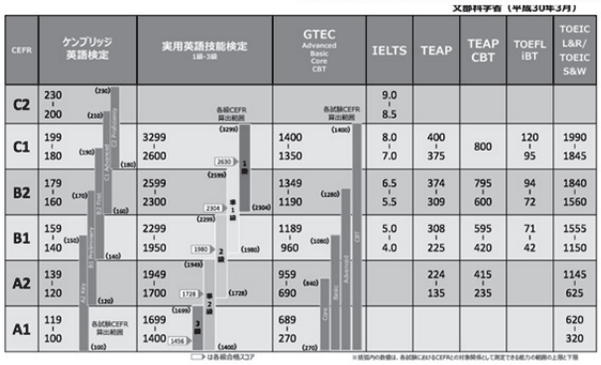
(表 1)国際ビジネスコミュニケーション協会による CEFR 対応表

(表 2)文部科学省による CEFR と各資格・検定試験の対照表

熟練した言語使用者	C2	聞いたり読んだりした、ほぼ全てのものを容易に理解することができる。いろいろな話し言葉や書き言葉から得た情報をまとめ、根拠も論点も一貫した方法で再構築できる。自然に、流暢かつ正確に自己表現ができる。
	C1	いろいろな種類の高度な内容のかなり長い文章を理解して、含意を把握できる。言葉を探しているという印象を与えずに、流暢に、また自然に自己表現ができる。社会生活を営むため、また学問上や職業上の目的で、言葉を柔軟かつ効果的に用いることができる。複雑な話題について明確で、しっかりとした構成の、詳細な文章を作ることができる
自立した言語使用者	B2	自分の専門分野の技術的な議論も含めて、抽象的な話題でも具体的な話題でも、複雑な文章の主要な内容を理解できる。母語話者とはお互いに緊張しないで普通にやり取りができるくらい流暢かつ自然である。幅広い話題について明確で詳細な文章を作ることができる。
	B1	仕事、学校、娯楽などで普段出会うような身近な話題について、標準的な話し方であれば、主要な点を理解できる。その言葉が話されている地域にいるときに起こりそうな、たいていの事態に対処することができる。身近な話題や個人的に関心のある話題について、筋の通った簡単な文章を作ることができる。
基礎段階の言語使用者	A2	ごく基本的な個人情報や家族情報、買い物、地元の地理、仕事など、直接的関係がある領域に関しては、文やよく使われる表現が理解できる。簡単で日常的な範囲なら、身近で日常の事柄について、単純で直接的な情報交換に応じることができる。
	A1	具体的な欲求を満足させるための、よく使われる日常的表現と基本的な言い回しは理解し、用いることができる。自分や他人を紹介することができ、住んでいるところや、誰と知り合いであるか、持ち物などの個人的情報について、質問をしたり、答えたりすることができる。もし、相手がゆっくり、はっきりと話して、助けが得られるならば、簡単なやり取りをすることができる。

（出典）ブリティッシュ・カウンシル、ケンブリッジ大学英語検定機構

文部科学省（平成30年3月）



(表 3)文部科学省による CEFR の示す 6 段階の共通参照レベル

TOEIC Program (TOEIC® S&W,TOEIC® R&W,TOEIC Bridge) の IP テストも含む総受験者数は国際ビジネスコミュニケーション協会の発表によると約 270 万人で採用している企業は約 3600 社となっている．参加者の国籍の多くは日本と韓国であり，受験者層に偏りがあるという事実はあるものの TOEIC® は多くの人々によって受けられてる試験である.また多くの大学の編入試験や大学院入試．本校の専攻科入試にも使用されており,本校の比較的多くの学生が目指す試験でもある.TOEIC Program は上に挙げたように大きく 3 種類に分けることができるが，本校が採用しているのは TOEIC® IP テストと TOEIC Bridge®である．

上の二つは Listening(聞くこと)と Reading(読むこと)の二つのセクションから成り立っており，Speaking(話すこと)や Writing(書くこと)は測定の材料にはならない．つまり，TOEIC®と TOEIC Bridge®を判断材料にした学生の英語能力は Listening(聞くこと)と Reading(読むこと)においてのみ測定可能であると言える．

３．本校での TOEIC Bridge®の扱いについて

川村(2013)[3]において紹介されている通り本校は平成 22 年(2009)年度から 2 年生から 4 年生の学生に TOEIC Bridge® を受験させ,翌年平成 23(2010)年度からは 1 年生も含めて受験させている．受験開始後 3 年間のスコアの推移を見ると,全国の高専では平均点の伸びがそれほど見られないのに対して本校では少しずつではあるものの平均点が伸びていると報告されている. 2017 年現在では毎年平均点は少しずつ伸びている傾向にありまた本校でも少しずつ伸びていることを述べているが全国の高専の平均点よりは上を保っていると報告されている．

しかしながら，サンプルサイズの差を考えれば全国の高専のスコアの平均が伸びづらいことは当然であるので,本稿においては上昇率の差ではなく，平均値の差を元に論を進めることとする．

また，他高専で TOEIC Bridge®が学習単位化されていたり，単位認定の資料にされる場合があるのと同様に,本校でも 2 年生から 4 年生まで，学年に応じて一定の割合ずつ英語Ⅱ，英語Ⅲ，英語Ⅳの平常成績に加算することをシラバスに明記している．

４．過去 5 年間のスコアの推移について

4. 1 使用したデータについて

本稿で取り上げるデータは本校の学生の平成 25(2013)年度～平成 29(2017)年度の合計 5 回分のスコアデータと日本で TOEIC Program を運営する国際ビジネスコミュニケーション協会が例年開示しているプログラム受験者全員の所属別平均点のデータ[4]～[8]である．

4. 2 使用したデータの扱いについて

本校の学生の受験者データは独立したストレージサーバーに学年とスコアのみをラベリングし，パスワードをかけられた.csv 形式で保存され, 本データからの個人の特定は不可能である．

4. 3 データの表とグラフ

上のデータを処理し，全国の高等専門学校の Listening, Reading 別平均点と合計点の平均を以下の表4~8にまとめた.

(表 4) 平成 25(2013)年度

	全国の高等専門学校					本校			
	受験者数	平均点				受験者数	平均点		
		Total	Listening	Reading			Total	Listening	Reading
1年生	3,619	112.6	57.4	55.2	1年生	162	115.3	57.4	57.9
2年生	3,471	117	59.2	57.9	2年生	160	121.9	60.4	61.5
3年生	3,256	118.6	59.5	59.1	3年生	163	126.2	61.7	64.5
4年生	336	122.4	60.6	61.8	4年生	184	127.8	62.1	65.7
全体 含5年生	10,686	116.2	58.7	57.5	全体	669	123	60.5	62.5

(表 5) 平成 26(2014)年度

	全国の高等専門学校					本校			
	受験者数	平均点				受験者数	平均点		
		Total	Listening	Reading			Total	Listening	Reading
1年生	3,687	110.9	57.1	53.8	1年生	161	119.1	60.7	58.3
2年生	3,310	116.5	59.3	57.1	2年生	168	122.6	60.3	62.2
3年生	3,352	119.2	60.2	59	3年生	160	127.7	62.5	65.2
4年生	325	120.1	60.1	60.1	4年生	157	126.8	61.9	65
全体 含5年生	10,676	115.5	58.9	56.6	全体	646	124	61.3	62.7

(表 6) 平成 27(2015)年度

	全国の高等専門学校					本校			
	受験者数	平均点				受験者数	平均点		
		Total	Listening	Reading			Total	Listening	Reading
1年生	3,235	116.8	58.6	58.1	1年生	163	117.3	58.1	59.2
2年生	3,441	120.9	60.1	60.8	2年生	159	125.8	61.5	64.3
3年生	3,231	122.5	60.8	61.7	3年生	158	130.3	63.1	67.3
4年生	177	133.3	64.8	68.5	4年生	152	135	65.3	69.7
全体 含5年生	10,104	120.3	59.9	60.3	全体	632	126.9	61.9	65

(表 7) 平成 28(2016)年度

	全国の高等専門学校					本校			
	受験者数	平均点				受験者数	平均点		
		Total	Listening	Reading			Total	Listening	Reading
1年生	2,827	122.7	58.4	55.9	1年生	159	121.8	61.6	60.2
2年生	3,169	117.2	59.8	58.3	2年生	164	122.4	60.2	62.2
3年生	2,505	121.5	61.4	61	3年生	148	130.9	64.4	66.7
4年生	170	133.3	64.8	68.5	4年生	161	133.5	65.1	68.4
全体 含5年生	8,677	118.4	59.9	58.5	全体	632	127.1	62.7	64.3

(表 8) 平成 29(2017)年度

	全国の高等専門学校					本校			
	受験者数	平均点				受験者数	平均点		
		Total	Listening	Reading			Total	Listening	Reading
1年生	2,782	116.8	59.4	57.4	1年生	161	122.9	61.6	61.3
2年生	3,415	119.6	60.7	58.9	2年生	160	126	62.1	64
3年生	2,435	122.2	61.3	61	3年生	158	128.2	62.6	65.5
4年生	169	132.3	64.7	67.7	4年生	155	133.8	65	68.8
全体 含5年生	8,405	119.7	60.5	59.2	全体	634	127.7	62.8	64.9

TOEIC®の試験についても例年平均点は上昇傾向であり， TOEIC Bridge®においても同じように 5 年間で全国の高等専門学校の平均点は+3 と上昇傾向にあり，本校においても 5 年間で平均点は+4 と上昇している.

次に，平成 25(2013)年度入学生,平成 26(2014)年度入学生のデータを利用し，4 年間の推移を図にまとめる.

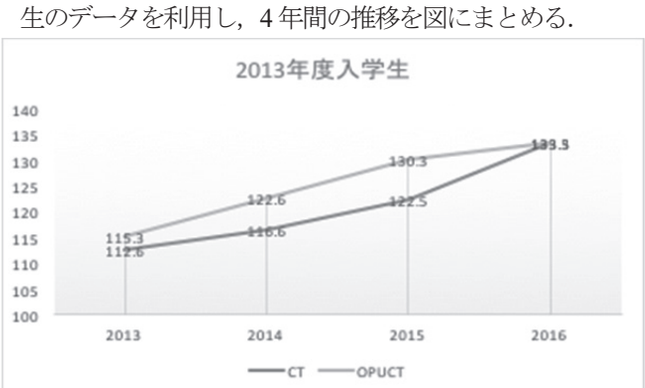


図 1 2013 年度入学生の TOEIC Bridge®スコアの推移

図の実線 CT が全国の高等専門学校の平均点,

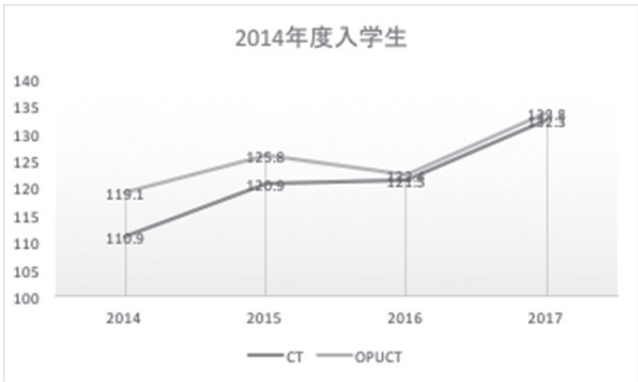


図 2　2014 年度入学生の TOEIC Bridge®スコアの推移

OPUCT が本校の平均点である．4 年間のデータを使用した図であるが，上の表が示す通り，2013,2014 年度は 4 年生の受験者数が約 300 名であるが，それ以降はおそらく本校の学生が主な受験者である．上の図に採用している 2013,2014 年の 4 年生の受験者数は本校の受験者数と大きく変わらないので，差はそれほど広がらないと推測できる.

5．過去 5 年間のスコアからわかること

上の表と図から，本校の学生は入学時から高等専門学校全体の受験者より TOEIC Bridge®で測定可能な範囲の英語力は上位であると考えると言える．また，平均は 4 年次で 133 程度であることから,CEFR 換算表を元に推測すると本校の学生は A2 レベルであり，2020 年度の入試改革時に国立大学協会が求める大学入試時の受験者の出願資格となる英語力を満たしていると言える．しかしながら，A2 が英語運用能力が高いとは言えず，スコアのさらなる向上を目指さなければならないことは言うまでもない.

高専は卒業後に就職先で即戦力として活躍することができる技術者を養成する機関であり，日本企業の海外進出や海外の企業との合併等で学習者にはある程度の言語(特に英語)の運用能力が要求される．また，より現実的な問題として, TOEIC®のスコアを昇進や昇級の条件として掲げる企業もあり，外国語コミュニケーションを行う以外の目的であっても, TOEIC®の重要性はこと日本においては高まっていると言える.

TOEIC®といえば，多くの場合 L&R のことを指し，リスニングとリーディングの 2 技能試験となる．問題数は 100 問ずつで, 初級学習者にとっては制限時間内に全ての

問題に目を通すことすらも難しい試験である.

本校では第 2 学年後期より授業の一部を音響や，教材提示用の機器を整えた CALL(Computer Assisted Language Learning:コンピュータ支援言語学習)教室(写真 1)を使用して行なっており，また授業時間外の学習支援として e-learning システム(写真 2)も導入している.

(写真 1)本校の CALL 教室の様子

(写真 2)本校の e-learning システムの画面

本校では残念ながら教養棟の HR 教室の近代化がそれほど進んでおらず，近隣の中学校や高等学校よりも教育の ICT 化は遅れている．CALL 教室一室ではとても学生の英語能力を高める工夫を重ねた授業を展開することは難しい．現状での TOEIC Bridge®スコアの平均は全国の高等専門学校の平均よりも高いが，それもいつまで維持が可能であるかは疑問の余地がある.

６．まとめ

本稿では，TOEIC Bridge®の実施状況，全国の高等専門学校の平均スコア，本校の実施学年の平均スコアを報告し，平均値をみれば，本校の学生は全国の高等専門学校の TOEIC Bridge®の受験者よりは高いと考えられることを報告した.

また，TOEIC®を取り巻く社会状況，本校の英語教育の状況と課題を簡単に説明した.

本報告が，本校教職員にとって本校の学生の TOEIC Bridge®に基づいた英語運用能力を把握する上で役立つものとなれば幸甚である.

参考文献

[1]大学入学共通テストの枠組みにおける英語認定試験及び記述式問題（国語）の 活用に当たっての参考例等について. (2018 年 6 月 12 日). 参照日: 2018 年 8 月 20 日
参照先
:http://www.janu.jp/news/files/20180612-wnew-exam_framework.pdf
[2]大学入試英語成績提供システムへの参加要件を満たしている資格・検定試験と CEFR との対照表について. (2018 年 3 月 26 日). 参照日: 2018 年 8 月 20 日,
参照先:
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/30/03/1402610.htm
[3]川村珠巨. (2013). TOEIC(R)/TOEICBridge(R) IP テスト実施報告 ： TOEIC 受験奨励 制度運用 3 年を振り返って (第 47 巻). 大阪府立大学工業高等専門学校研究紀要.
[4] TOEIC®プログラム DATA & ANALYSIS 2013 2013 年度 受験者数と平均スコア.一般社団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会
[5]TOEIC®プログラム DATA & ANALYSIS 2014 2014 年度 受験者数と平均スコア. 一般社団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会
[6]TOEIC® Program DATA & ANALYSIS 2016 2015 年度 受験者数と平均スコア. 一般社団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会
[7]TOEIC® Program DATA & ANALYSIS 2017 2016 年度 受験者数と平均スコア. 一般社団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会
[8]TOEIC® Program DATA & ANALYSIS 2018 2017 年度 受験者数と平均スコア. 一般社団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会